第 2016-09 号

恵みと真理のニュース

2016 年 2 月の四次　恵みと真理教会
韓国 京畿道 安養市 萬安区 安養路 193 / ☎82-31-443-3731 / www.gntc.net

[証]

二回も死にそうだった母を生かしてくださり、私の家族の全てを救ってくださる神様に感謝します

私は生まれてから病弱でした。私が健康になるため親でなく他の人の息子で戸籍に乗せました。そうすれば私が長く生きると思ったそうです。そのように酷く偶像崇拝をする家庭でした。
中学校2年生の冬に村の人のほとんどの人が偶像崇拝をしている村で教会が建てられました。入党礼拝の時、むらの友達から教会に行くと食べ物をくれると聞いて好奇心で教会に行ってみました。
その時には知らなかったですが、神様が家庭を救ってくださる驚くなことだと後で悟りました。イエス様を信じて救いの確信を持って妹弟を伝道して母もイエス様を信じるようになりました。祖母と祖父以外全てが教会に通うようになりました。家族みんなが信仰生活をすると信仰生活を妨げるサタンの攻撃があって苦難が来ました。
母は高血圧があったにも家計のため働きました。秋のある日母が働いて終わって家に帰る 道で気を失って倒れ血が出るてる手をとって家に戻って来ました。次の日にその原因が脳出血であったのを知りました。父は朝早く仕事に行って母は話すことが出来なくてずっと横になっていましたが誰も危機な状況である事を知らなかったのです。結局母は父の 背中に背負われて漢方医院に行って応急処置を受け、すぐさま大田(テジョン)にある漢方病院の集中治療室に入院しました。ＣＴ撮影をして様々な検査をして結果を確認すると左の脳血管が破れて生きるか死ぬか半分で一生体の半分は使えないかもしれないと言われました。
惨憺な話を聞いて私の家族は命なる全能なる神様にこころから祈りました。癒しの恵を望みながら神様を仰ぎました。神様は驚き治癒の恵を通して神様の栄光を表してくださいました。母は45日くらい病院で薬を飲んで治療を受けて神様の恵みである程度回復して退院しました。そして約8年間のリハビリと薬を飲んで完治され脳出血の後遺症からも解放されました。母の治療と回復する過程を見た医師は神様の奇跡ではないとこのように元の状態で戻るのはあり得ないと言われました。神様に感謝する事はこの全ての過程を見た祖母が神様が生きておられる事と全能なるイエス様を受け入れ信仰生活をしたのです。ただ、父だけは心が硬くて福音を断って神様を信じませんでした。
1996年私は神様が予備してくださった配偶者に出会って結婚しました。そしてIMFの時会社を失職をしてしばらくオサンで住んでいる時に恵と真理教会の聖徒になりました。当時6ヶ月くらい住みながら教会を決めない時に区域長が毎日のように家に来て私達を伝道しました。　その姿に感動されスワン聖殿に行って礼拝を捧げるようになって、その日、当会長の牧師の説教を聴いて心が平安になり幸せでした。“あまたの仰せを味わえば私の口に蜜よりも甘いことでしょう。”（詩篇119：103）という御言葉が実感します。その後、毎日礼拝を捧げる時間を楽しみでした。
神様は寝なくて休まずに永遠な命を与えるため働いてくださる神様の奇跡をもう一度体験しました。
私がイルサンで働いている時にでした。母が風邪を引いて長い間薬を飲んでも治らなくて病院に行って検査をすると結核という病気の診断を受け3ヶ月くらい薬を飲みました。薬があまりにも強くて母は腰や膝まで痛くなりやせていきました。それで母のため漢方薬を買って結核薬と一緒に飲もうと頼んで私は家に戻りました。 ところが、しばらく経たないうちに母親が突然倒れて大田(テジョン)にある大学病院に入院したという話を聞きました。 私たち夫婦は急いで病院に駆け付けました。 そしてまだ正確な病名がないと言われ母を自分が住んでいるイルサンの病院で移動させました。ところが時間が過ぎても治らなくむしろ肝数値が引き続き上昇して正常な人の数百倍に該当する数値に達して、とうとう黄疸の症状とともに、全身がむくむくに腫れ、非常に危険な状況になりました。危機を思った医師はもう危ないと大きい病院で移動するとしました。急いで母をソウルになる大きい病院の応急室に移送しました。その医師も可能性がないと言われ心の準備をしなさいとしました。
私の連絡を受けて父がすぐソウルに来ました。どころが危機の状況で母は父に“あなたがイエス様を信じると今死んでも良い。”と言いました。すると“父は涙を流して母の手をとって“あなたがこのようにせつに頼むならこれからはイエス様を信じる。死なないでね。”と言いました。
私の妻が教区の伝導士に連絡をして父は母の願いによって母の近い所で伝導士の導きに従って決信祈りをしました。そうすると神様の驚くな治療の恵が望まれすぐ健康が回復しました。現在母と父が健康で熱心に神様を信じて恵みと愛を伝える人生を生きています。当時、私たちの家族には大きい試練と苦難でしたが究極的には偶像崇拝をする家庭が神様の驚くべき救いの恵が望む福なる時間でした。
母を命を救ってくださった神様、万時が益となるように共に働く神様、神様だけを信じ、支える福を与えて下さり感謝し栄光を捧げます。主が来られる日まで神様の恵みと愛を伝える事に心と力を尽くします。ハレルヤ！

[信仰コラム]

神様の秘密、五つの

″このようなわけだから、人はわたしたちを、キリストに仕える者、神の奥義を管理している者と見るがよい。″(コリント人への第一の手紙 4:1、2)

″神様の秘密″は人間の利害を超越する神秘が、その中において神様が公開していなければ誰も知ることができず、神様から許可された人だけがその秘密の意味を悟るようになります。 私たちが知ってこそ、して信じなければならず、広く知らせなければならない″神様の秘密″について説明します。
第一は、″キリストの秘密″です。
人間は神様の姿や形どおり著受けた特別な存在だが神様の言葉に不順従し、犯罪者になり,彼によって神様の怒りの下に置かれるようになりました。 神様はこのような罪人を救援して向けて驚いて救いな計画を立てました。 その計画が″拘束の恩″です。 遂に神様がお決めになった時が冷たくなって救世主イエス様を世に送って拘束使役を完遂させました。 そして、イエス・キリストによっている救援の恩は世界中に知られている秘密がなりました。 誰でも救いを得るためには、″神様の秘密″のこの″拘束の恩″を悟って信じなければなりません。
第二は、″イスラエルの救い秘密″です。
アブラハムの子孫であるイスラエル民族は神様に仕え、異邦人に、神様の救援計画を知らせなければならないという使命を持つようになったが、彼らに与えられた特権と幸福な任務を放っており、神様からもらった久遠の恵みを背にしてしまいました。 しかし、神様はイスラエル民族を捨てないて救援得る者を残しました。異邦人の中で神様が選択した者たちの数が完全に満ちてその時はイスラエルが民族的レベルで、イエス・キリストを信じて救いを得るようになることがあるようになることです。
第三は、″主キリストの再臨の秘密″です。
イエス・キリストの再臨がある前に、二つの現象に″背教すること″があり、″不法の人はすぐ滅亡の息子″が現れると主張しました。 イエスの再臨前にいることになる背教は著しく、大々的に起きるでしょう。また、滅亡受けるように運命づけられた不法の人が登場して自ら高め、神様を闘ってサタンの活動のために、あらゆる能力と標的と偽りの奇跡らと全ての不義のトリックを使って迷惑します。 こんな時真理を信じず、不義を好きなすべての者たちが彼にまよって反キリストを神様に仕えるようになることです。 その時にイエスが地上に再臨し、不法の人である反キリストを滅ぼすことです。(テサロニケ人への第二の手紙 2:1~12)
第四は、″天国秘密″です。
イエスが人々には天国の性格について種まきする比喩など七つの比喩におっしゃいました。 弟子がイエス様に″どうして彼らには比喩でおっしゃるんですか.″と尋ねると、イエス様が返事することを″そこでイエスは答えて言われた、「あなたがたには、天国の奥義を知ることが許されているが、彼らには許されていない。″(マタイによる福音書 13:11)としました。 この答えは″天国の秘密″を知ることが人の努力や知恵になく、神様が啓示して知らせてくださらなければなるということを意味します。
五番目は、″復活の秘密″です。
聖書には″復活の秘密″を非常に詳しく公開しておきました。 イエスが再臨するときには復活することになります。 復活の手順を見ると、キリストの中で死んだ者たちが先に復活します。 イエスさまが降臨するときに聖徒の魂を連れて来られます。 その時彼の体がどのような状態で存在するか関係なく復活され、その魂と結合することになります。 引き続いてこの世に生きている聖徒たちが瞬時に忽然と変化することです。 そして、雲の中で引っ張られて入ってから空中で主を迎接することになります。
人生の中で一番可哀想な人は、″神様の秘密″を聞いていない人と聞いてもこれを悟ることの出来ない人です。したがって、″秘密″と呼ぶのが妥当します。 しかし、神様が選択した人たちには知られている秘密です。 ″神様の秘密″を聞いて、その意味を悟って信じている皆さんは″神様の秘密を請け負った者″です。 ″請け負った者に求めるのは、忠誠″だと言いました。 ここに忠誠の意味は任せてくださった神様の秘密、啓示された神様の秘密を広く伝播することをいいます。

「チョヨンモク牧師先生の信仰コラム‘緑の牧場、清い川’本の語り中」

逆説的な真理

恵みと真理教会 **チョヨンモク** 牧師

“忙しかったら後ろ向きになって行きなさい” “分かる道も尋ねて行きなさい” こんな格言は常識的には矛盾する言葉だが、実質的な内容は真理を現わしています。 こんな表現を逆説だと言います。 聖書には逆説的なお言葉があります。私たちは一般的に勝つ者になろうとすれば力と謀が多くなければならないと思います。強さの反対が弱さと思います。 ところで聖書にはこのような常識に矛盾するようにおっしゃっています。 勝利者になろうとすれば屈服されなければならないし、強くなろうとすれば弱くならなければならないと言いました。 今日はこのような逆説に対してよく見ます。

先ず、屈服した人だけが真な勝利者になることができるという聖書の教訓をよく見ます。

“わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである。（エペソ人への手紙，6:12）そして患難と試験に対するのです。 こんなけんかで勝利しようとすれば先ずに経験しなければならないことがあります。 それは神様に屈服する経験です。 私たちが得るようになる勝利は神様に屈服する体験の深さに比例します。 このような真理を説明するのに役に立つ人物の中にヤゴブがあります。
ヤゴブの父はイサクで母はリブガです。 リブガは双子を懐任しました。 出産する時エサウが先ず生まれてヤゴブが後で生まれました。ヤゴブはたとえ次男で生まれたが長男に与えられる福を受けるのを願いました。 ある日、母がヤゴブを呼んで言うのを “お前の父が兄エサウを呼んで狩って別味を作って来れば祝福をしてくれると言った。あなたの兄が帰って来る前に私がお前をエサうに変装させて別味を作ってくれるはずであるから父に行って祝福を受けるようにしなさい”としました。
ヤゴブは母の積極的な勧誘でエサウに変装して目が暗い父から祝福を受けました。 それゆえヤゴブは恨みを得るようになって遠くて遠いハランにある母のおじ家で逃避しました。 母のおじはひどくけち臭くて奸巧しました。 ヤゴブは悔しい事をたくさん経験したが神様の面倒を得て結局は羊の群れと牛の群れと奴婢が多くなるようになりました。 多くの子を産むようになりました。 ヤゴブは 20 年間の苦難を終わり家族と奴婢と家畜群れを従えて帰郷に上がりました。 故郷の家が遠くないヤブボック川に着くとヤゴブは兄の動態を確認しようとしもべを送ってお見舞いさせました。 ところでしもべが帰って来て伝えるのは今 400 人を従えてこちらへ来ているというのでした。 ヤゴブが甚だしく恐ろしかったです。 彼は家畜を種類どおり選んで多くの群れを作って一つ群れずつはなしてしもべの手に任せて各群れの間に距離を置いて進行するようにしてエサウに贈り物に送りました。
そして二人の妻と二りの女しもべと十一息子を導いてヤブボック川を渡らせました。 ヤゴブは一人きり残って事態を注視しました。 若しもひとりでも逃げるつもりでした。 ヤゴブは自分の知恵と方法をすべて動員しました。 もう残った手段は元気な二つの足だけでした。
日が暗くなった時でした。 誰かヤゴブを突然抱きしめました。 ヤゴブは身震いをしたが自分をつかんだ方が神様の天使というのが分かりました。 彼は神様の天使に “私を祝福してください。” と切に求めました。 ヤゴブがしつこくつかんで垂れるので天使がヤゴブの尻を打たから尻骨が脱骨されました。 天使が言うのを “日が明るくなる私を送りなさい。” としたらヤゴブが “私を祝福しなければ送ってくれないです。” と言いました。 天使がヤゴブに聞くのを “あなたの名前が何なのか?” したら、“ヤゴブです。” と答えました。 天使が言うのを “あなたの名前をこれ以上ヤゴブと呼ばないで、イスラエルと呼ぶはずであるからあなたが神様と人でいっしょに競って勝ったからである。” としました。 “あなたが神様と人でいっしょに競って勝った。” というお話は反語的な表現で解釈しなければなりません。神様と競って勝つ者は天下にどこにもないです。 “あなたが今やっと初めて神様に屈服した。” という意味がその中あります。 ヤゴブは彼の二つの足を最後の方策にしてヤブボック川を渡り一人たけが残っていたのです。 ところで天使がヤゴブの尻骨を打って脱骨されました。 ヤゴブが最後の頼った方策が無用のとこになってしまいました。彼が神様と競って勝ったのではなく完全に敗れたのです。 徹底的に神様に屈服するようになったのです。 暗たんたる夜が去って日が明けました。 たとえ彼はこれから進んだが神様の能力が現われて心を変化させました。 馬に乗って一手は手網を他の手は恨みの刀を取ってヤゴブをにらんで来た心に急にあわれな考えが来るように押し寄せました。エサウが馬から降りて駆け付けて両腕を開けて抱えこんでヤゴブの首を抱きしめて口付けながら泣きました。エサウが言うのを “私たちが一緒に行こう。私があなたの前に進もう。” としました。 害しようと駆けて来たエサウが返ってヤゴブを警護することになりました。 神様がヤゴブに驚くべきな方法で勝利を経験するようになさったのです。

次は、弱さが強さになるという聖書の教訓をよく見ます。

人間は自分の不足と弱さが分かるから信仰が始まります。 人が自分の力を頼る以上福音の恵みと能力の中に生きて行く幸せを味わうことができないです。 そうするから神様は自ら高めて自慢する人を患難を通じて破って自分が無能で弱いのを実際を悟らせます。 誰でも福音の恩寵に参詣するためには先ず自分の無能と弱いを悟らなければなりません。 もうイエスキリストを信じて福音の能力に 参詣される聖徒でも続いて自分の弱いを深く認識しなければなりません。 聖徒が自分の弱いを常に認識するのがどんな理由で権能ある生活をする条件になるかを説明してくれる示しの中に使徒パウロがいます。 パウロは彼がクリスチャンになる前には罪の権能を自分の努力と善行と律法を行うことで充分に乗り越えることができると確信しました。彼がこんな確信を完全に捨てたことはダメセック道の上で現われたイエスキリストがお会いできた以後です。 パウロは罪とサタンの勢力に対して自分が全面的に力無くて無能を悟るようになりました。
そして罪とサタンの権勢を勝ったイエスキリストを自分の救世主に迎接しました。
ところで使徒パウロは福音を伝える使役を遂行するのにあっては自分の力と知恵としてすべての事を処理して行こうとする意志が強かったです。 パウロは他人と比べて見る時自分の力と知恵を頼るの理由がたくさんありました。 彼は国際的な都のダーソ出身でローマ市民権を持っていたし当代のすぐれた碩学であったガマリエルの門弟でした。 また彼はアブラハムの血統を生れついた純粋なイスラエル人でヘブライ語にうまかったし律法どおり生まれから八日ぶりに割礼を受けたバリサイ人でした。 このような事実によって彼は事毎に自信満満としました。 そして彼が使徒になった後に極めて大きい多くの啓示を受けたし神秘体験をしました。ところでこのような条件はパウロの使役するには障害物になるものです。 パウロがこんなものなどを寄り掛かって自信感を持ったら驕慢になって自分の自慢をするようになって光栄を自分が得るようになってしまうでしょう。 そうするから神様がパウロに突く刺をくださってパウロが自分の弱いを常に悟って神様の権能を熱く慕って切に頼らせたのです。
使徒パウロはその悟りをこんなに記録しました。 “そこで、高慢にならないように、わたしの肉体に一つのとげが与えられた。それは、高慢にならないように、わたしを打つサタンの使なのである。このことについて、わたしは彼を離れ去らせて下さるようにと、三度も主に祈った。ところが、主が言われた、「わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」。それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。だから、わたしはキリストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりとに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである。”（コリント人への第二の手紙，12:7,10).
神様の能力を受けようとすれば先ず自分の不足と弱いが分からなければなりません。 理論ではなく実際にこれを悟るようにならなければなりません。 そうするために神様はその人に苦難の刺をくださったり患難の水と火を通過するようになさいます。 使徒パウロはコリント人への第二の手紙，4 章 7 節にこんなに記録しました。 “しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである。” 土の器の価値や強さにおいてはしがないです。 ところで私たちが土の器というのを悟って神様を頼る時に財宝であるイエス様が世の中にいらっしゃって大きい能力を供給します。

“勝利者になろうとすれば敗北者にならなければならないし、強くなろうとすれば弱くならなければならない。” 逆説的な教訓が皆さんの体験になって証になるように願いします。